
夢幻想

天川時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻想

【Nコード】

N0504E

【作者名】

天川時雨

【あらすじ】

生まれながらに特別なチカラを持ってしまった少女の行く末。

プロローグ

ハルカ

この子にそう名付けたのは、私の希望をこの子に託すため。

ハルカ

私の全て。

ハルカ

私の腕の中で寝息をたてる、小さな清い子。

ハルカ

ハルカ

どうか私のこの想いを

ハルカ

切なる、身を切るようなこの叫びを、今お前に

ハルカ

その名とともに、私は託す。私の全てを今、私はお前に託したの。

ハルカ

お前はわかっているの？

ハルカ

お前はいつか、私の苦しみとなり、希望となり

ハルカ

お前は私たち家族の絶望となる。

ハルカ

私の腕の中に、すやすやと安息をもたらしているお前。私はお前を誰よりも、何よりも、私のこの命よりも、心から愛おしく思う。

しかしお前はこの家族の絶望。この一族を闇に葬る存在。

ハルカ

ハルカ

私のハルカ。

切なる、身を切るようなこの叫びを、今お前に

ハルカ

その名とともに、私は託す。私の全てを今、私はお前に託したの。

ハルカ

お前はわかっているの？

お前はわかっているの？

ねえ、ハルカ――

第一話：暗がりの底で、今日も私は息をつく

何も見えない。

何も聞こえない。

何も感じない。

何も見たくない。

何も聞きたくない。

何も感じたくない。

ただ虚無でありたい。ぽっかりと穴の開いたような、空虚な存在に。私は此処に居る、ただそれだけの感覚。その感覚だけで良い。あとは何も要らない。私は私。それだけ。

先ほどからうるさい程に雑音がしている。戸をたたく音、壁に石を投げつける音、下衆な人間たちの罵声。うるさい、私本当にうるさい。

何も、もう何も私の中に入って来ないで。さもないと、私は壊れてしまう。しかし、私が壊れてしまっても誰も気にしてはくれないのだろう。今日も、そしてこれから未来永劫そのそうなのだろうと思う。だからこそ、私はただ虚無でありたい。

ここはともうるさい。

とても、

とても。

嫌気がさして、家の更に奥に籠もる。

居間の西側の襖を開ける。真っ直ぐ伸びる廊下。突き当たって、二方に分かれるうち右の廊下を進むと、正面に小さな木戸が見える。

三畳ほどの物置部屋。窓はなく、湿った、淀んだ空気が、肺いっぱいに広がる。ここはとても、落ち着く。何も聞こえない。この部屋のような感覚が、今はとても心地よい。暗がりの底で、今日も私は息をつく。何となく、私は明日もここに来る、来てしまう、そんな気がする。本当に、何の根拠も無いのだが。

闇と一体になれる気がする。いつそのこと、私の身体、このまま闇の中に溶けてしまえばいいのに。溶けて、いつさいの感覚がなくなってしまうばいい。

『それは死ぬということか』

闇が私に問う。

違う。私は死を望んでいるわけではない。

『いつさいの感覚を失うことと死ぬこと、どこが違う』

違う。私が望むのは無。虚無なのだ。不安や恐怖、悲しみに捕らわれることのない無出会いの存在。それが、ただそれだけが欲しい。『何も感じることをしたくは無いとお前は言う。しかし、何も感じる事が無いのなら、それは人間と呼べはしない。ただの抜け殻にしかすぎない』

違う、違う。そうじゃないんだ。

『この世に在ると言うことは、何かを感じると言うことだろう。何かを感じてこそ、生きていると言えるのではないのか』

違う：

闇は私を威圧する。とても、とても。そして問う。

『お前の言う虚無とは何なのだ』

私が望むのは無。何にも捕らわれることのない空虚な存在、虚無。

『それは死ぬと言うことだろう』

違う。違う。そうじゃないんだ。

『矛盾している』

幾度なく、無限に繰り返される問い、問い、問い。私はこの生涯の内に、この問いの答えを見いだせるのだろうか。

私は虚無を望む。しかし、その“虚無”とは何なのだろう。

死ぬのは嫌だ。冷たい抜け殻になって、炎に焼かれて、灰になって…。その灰ですら、引き取ってくれる者のいない私は、どこか知らない土地に風に吹かれて飛んでいって。私が生きていた証などどこにも残らずに：

この家も、そのうち焼かれるのだろう。イカレタ人間たちに、灰

にされて。

私たちが何をしたのだろう。私たち一族が、何を？

“ 集団社会は、いつでも異物を排除する ”

母さんの口癖。私たちは異物なのだろうか。本当に？ 本当に？

こんなチカラ、望んでいたわけじゃないのに。阻害されるだけで、何の役にも立たない。

生きることが、生きていくという事実が、こんなにも苦しい。

チカラのせいで、どんなにあがいても光の下を歩くことは私には許されない。母がそうであったように。

どんなにもがいても、どんなにあがいても、私には聞かない。見えない。何も聞こえない。楽しそうな同年の少女たちの話し声なんて、聞こえない。聞こえない。

この独房のような空間が、不意に忌々しく思えた。私を捕らえる、この空間。私は小さな木戸を力一杯開け放ち、廊下へ踏み出した。相変わらず外からは耳障りな雑音が絶え間なく響いてくる。

やめて…やめてくれ…やめろ！！

私は実体のない、何かもやもやとした、どす黒い感情にただ突き動かされて、気がついたときには玄関の戸を開けはなっていた。目の前にあったのは、呆然と、かしはつきりと恐怖の色が浮かんだ中年の男たちのカオ。その手にあるのは、つい先ほどまで我が家に投げつけられていた小石。響いていた罵声は、水を打ったようにやみ、辺りには張りつめた緊張だけがあった。

私は自分自身が作り出した状況が、目の前の状況を、上手く飲み込むことができず、ただ呆然としていた。

「なっ…何をする気だ…俺たちに…何を…」

小柄な、鼠に似た男が、恐怖で目を見開きながら、私に言った。

私は何もする気はないし、出来ない。この人は何を言っているのだろう。困惑を伝えようとする。けれど、

「出て行け！！」

「バケモノがっ」

小柄な男の一言が、緊張の糸を切ったのだ。

ぶつけられる罵声、罵声、罵声。

やめろ！やめてくれ！！

私の足元には、先程男たちが投げつけていた小石が散乱していた。私はほとんど無意識にそれを拾った。指先から硬く、丸っこい感触が離れる。

小柄な男が倒れた。

「私がそんなに怖いかな？」

——私の前からは、誰もいなくなった。

第二話…この世を二分する者の価値観（前）

僕の住む村には恐れられているモノが二つ有る。一つは神無の一族、そしてもう一つは夢鬼童。

神無のお屋敷はこのさびれた農村の北のはずれ、森のすぐ近くに位置している。住人は、少女が一人住んでいる。以前は親子三人で住んでいたらしいが、親二人は五年前に死んだ。死因はわからない。変死だったらしい。遺体は火葬にし、焼き尽くし、灰は森の奥に撒かれた。村人の手によって。残された少女は、大名や役人なんかから貰う仕事で細々と食いつないでいるという噂だ。

噂と言えば、この神無の一族には昔から奇妙な噂があった。

——神無の一族は千里眼なんだって

どうやら仕事と言うのは、この類のものらしい。

僕は本当のところを知らない。村の誰もが実際そうなのだろうと思うが、この噂を真に受けた下衆な大人たちが神無のお屋敷の前で毎日飽きもせず嫌がらせを続けている。もう一つの恐怖、無鬼童は、神無の一族に由来していると思われる。読んで字のごとく、無鬼童とは夢に出てくる鬼の童子のことだ。所謂迷信の部類の話である。しかし老人は未だにこの無鬼童を厚く信仰しており、何かにつけてこの話をしたがる。彼らが木陰で休んでいるとき、なかなか寝付けない孫を寝かしつけているとき、彼らは言うのだ、

「あんたは、無鬼童を知っておるかえ？」

熱心な“御信仰”にも困ったものだ。

くだらない、と思う。

神無の一族は災難だと僕は思う。

同情する気は無いが、それに近い感情はある。

根も葉もない噂のためにずっと昔から阻害され続けてきた彼らはいったいどんな気持ちで日々を過ごしてきたのだろう。僕は迷信の類は信じないが、仮に彼らが千里眼であったとしても、村に何か害を

及ぼしたわけでもない。彼らは本当にただひっそりとそこに居るだけなのだ。阻害される理由がどこにあると言うのか。以前一度だけ、神無の娘に会ったことがある。夏、月の良い晩に河原を散歩していた時のことである。娘が水に手を浸していた。月の明るい晩ではあったが、夜半に若い娘が一人歩きとは。何かのつぴきならぬ事情でも有るのだろうかと思い、声をかけた。

「おい、娘。こんな夜半にお一人か？月の良い明るい晩とて、一人歩きとはいささか不用心。それとも何か事情がおりか」顔を上げた娘の姿は、この世の者でないかのように、ただただ美しいばかりだった。雪のような白さに紅い唇、物腰はどこまでもやわらかく、発する雰囲気は春の雪解けの水のように清らかだった。

呆然としている僕に彼女はにこりと笑いかけた。

第二話：この世を二分する者の価値観（後）

「あまりに月が綺麗でしたので、誘われて出てきてしまいましたの」
彼女は言った。着ている着物こそ立派なものではないが、言葉の端々、その雰囲気は、何か高貴なものを感じさせた。

「確かに今宵の月は見事だ。しかしやはり、娘の一人歩きは危ない。特に最近近くの村では神隠しが起きたとか。お気をつけなさい」

彼女は、形の良い紅い唇を少しほころばせ、くすりと微笑した。

「家まで送ってはいくさいませんか？」

そして僕は彼女を家まで送ったのだが、送った先があの神無のお屋敷だったのだ。

別段驚きはしなかった。何故か、彼女が村で恐れられている神無しの娘だということが、とても自然なことのようない気がしたからだ。普通の人間とは明らかに違う、そんな雰囲気は彼女は持っていた。しかし怖いとは感じなかった。それは単に彼女が美しかったからなのかもしれないが。

僕が思うに、本当に怖いのは神無の一族でも、無鬼童でもなく、この村自身だ。

この村の奴らは、自分自身のことをマトモな人間だと思い込んでいる。

自身のやっていることが異質なものを極端に恐れるがための偏見による根拠、理由のないただの悪質な虐めであるという事実には蓋をす。

そうして二分するのだ。

この世界全体を、自分らに都合のいいように。

異質なものを疎外する理由は何でも良いのだ。

そして見失う、自分たちの本当の姿。醜く、自分の見たいものにか目を向けず、欲望のみで膨らんだその腹を肥やす、獣の姿を。そんな彼らの価値観が、僕には理解できない。人を卑下することで得

る、自分の存在価値。所詮、この世を二分する者の価値観なのだ。獣の価値観なのだ。僕はそんなものに成り下がるのはごめんだ。

今夜は月が明るい。冬の月見もそう悪くはない。わらじの裏に畦道特有の粗い感触が心地よい。

冬の凜とした空気が、肌を滑り落ちる絹糸のようで少しくすぐつたい。こんなに良い晩は、闇が醜いもの全てを覆い隠してしまう気がする。本当にそうなら良いのに、と思う。本当に美しいものだけが純粹に在る世界を見てみたい。

不意に、何か奇妙な匂いが鼻を突いた。一瞬で消えたその匂いは、妙に鼻の奥にしつこく貼り付いて、僕の気持ちを何故か焦らせた。苦いような、甘いような、怖いような、優しいような、その匂い。遠くから獣のだみ声が聞こえる。汚らわしく、下品なその声は夜の村によく響いた。口調からして、かなり酔っている。僕は、その獣から発せられる声に耳を傾けた。夜風に耳が冷たかった。

「バケモノは今頃：焼けちまつてるだろおよ。どおだあ、俺あすげえだろう：てめえらあ、感謝しなあ：俺あ命の恩人だあぜえ：」
空耳かと思った。否、思いたかった。イカレテいる。

あの屋敷には娘が一人：たぶん今現在もそこに居る。何の罪もない、一人の娘がそこで、ごう火にその身を焼かれながら、今も。考えただけで吐き気がした。獣に、そこに居る汚らわしい獣に、怒りを越えた激しい感情を覚えた。

僕の足は自然と北に向かって駆け出していた。僕はただ耐えられなかった。

今夜は月が明るい。月光が僕の行く先を照らす。わらじの裏に、畦道特有の荒い感触が痛々しい。

鼻腔を、刺すような乾いた臭いが風に乗って撫でた。焦燥感を掻き立てるそれは、一步一步、歩を進める毎に大きく、強くなり、やがて僕の思考でさえも包んでいった。

目に映ったのは、目が焼けるように鮮やかな朱色だった。夜空に立ち上ったそれは、上に行けば行くほど紺色と溶け合い、美しい色

彩を織りなしていた。それはいつか見た、何とかという絵師の描いた夕焼けの絵に酷似していた。

バチバチと悲鳴を上げ、黒い塊が炭化し、崩れゆく。朱色の中で、黒い塊の姿がかすれてゆく。

僕は真っ白になった。予想以上の事態だった。

走ってきた僕は肩で大きく息をし、その場にひざをついた。風に乘って空気中を滑走する寂しげな灰が、息をする度僕の肺に充滿するようで苦しかった。目の前に紅々と立ち上る朱色が、僕の目をついて、その痛さで涙が溢れた。

あの子は？あの子は？

半ば絶望的な気分で、涙の溢れる目を無理矢理見開き、辺りを見回した。しかしどこにもそれらしい姿を見て取ることが出来なかった。

第三話：月明かりの下を君と（前）

どれだけの時間そこにいただろう。僕はただ呆然と燃え盛る屋敷を前に立ち尽くしていた。目の前の朱色はいつの間にか夜の闇の中に、か細く残るだけの存在となっていた。そしてその朱色の代わりに、どす黒く大きな塊が寂しげに、頼りなげに建っていた。

「大丈夫？」

不意に、背後から聞き覚えのある、透き通った声が聞こえた。

「何故こんなところに居るの？ここには何もないわ、何も。もう全てが終わった、ただそれだけの場所。あなたのような人が来る場所ではないの」

振り返る。

悲しげな目が、僕をとらえた。

あの娘だった。あまりにも悲痛なその瞳は、雪のように白い肌、清廉な雰囲気には似つかわしくなく、見ているこちらのほうが泣きそうなほどだ。

——スベテヲサトツテシマッタ

彼女の瞳は、そう僕に訴えているかのように思えた。

「良かった…」

彼女が無事でいたことに対する安堵の波が、じわじわと押し寄せた。つぶやいた僕に、軽く彼女は目を見張る。僕はその場に膝をつき、崩れるようにしてその場に座り込んだ。

「…あなた、変わっているのね。私の心配なんかしていたの？」

彼女は僕の前にしゃがみ込み、真っ直ぐにその瞳で僕の目をのぞき込む。

「何故？」

「…覚えてはいないだろうか。以前月明かりの下、河原でお会いしました」

かすれた声で答える。煙を吸ったせいだろうか、喉が一言発する

度にひりひりと痛む。娘は何も言わず、ただ僕を見ていた。その、あまりにも悲痛な瞳で。

不意に、娘は立ち上がった。

「こちらへいらっしゃい」

娘の言葉に導かれるように、僕はふらふらと立ち上がり、娘の後についていった。行った先は、いつかの河原だった。

僕が怪訝そうにしていると、水面をのぞき込めと言う。

不意に水面が近づいてきた。いや、僕が水面に近づいている、そう気づいたときにはもう全身を矢で射抜くような感覚が貫いた。頭の片隅で、冷たさというのは極限まで行くと冷たいとは感じないのだなと思った。

幸い浅瀬だったので、助かった。必死の形相で顔を上げると、娘のきやらきやらという笑い声が耳に入った。

「なっ…何をっ…」

「だって…真っ黒でしたもの」

そう言って、彼女は水面を指さした。よく見ると、すすで真っ黒に汚れた自分の顔が見えた。唾然として振り返ると、一点の曇りもない笑顔がそこにあった。

第三話：月明かりの下を君と（前）（後書き）

前回に続き、今回も前・後の二回ものになってしまいました（汗）
どうかお付き合ってください（^| ^;）

第三話：月明かりの下を君と（後）

風が吹く。水で濡れた身体に、その氷のような冷たさが染み入る。心地よいと感じていた夜風も、今は鋭利な刃物のように思える。

突如、けたたましい警鐘の音が村中に鳴り響いた。それは耳をふさぎたくなるほど声高に、人々に警戒、避難を促している。

「なっ…何が…」

「飛び火したの。私の家の火の粉が草むらに引火して、その勢いが森へ向いたの」

娘は言い終わると、何も言わずにある方角を指し示した。そちらを見ると、確かに夕焼け空のようにだいたい色に輝く夜空が見えた。

——大変だ

僕は口の中でそう呟いてから村の方へと一歩足を踏み出した。

対処が早かったこともあって、被害は小火程度で済んだ。僕が駆けつけたときには既に皆夜明けまでのほんの少しの眠りに着こうと、方々に散っていくところだった。東の空が少し白んでいて、それは何故か広大な海を思わせた。

——帰ろう

とんだ夜の散歩になってしまった。

あの娘はこれからどうするのだろうか？まだあの河原にいるのだろうか？見に行きたいが、足が疲れ切って思うようにならないのが腹立たい。何故だか、あの娘を放ってはおけない。僕には両親が居ない。その境遇を、僕はあの娘に重ねているのだろうか。

少しうつむき加減に歩きながら、後十数歩で戸口があるところまで来た時、クスクスと、鈴が転がるような笑い声が聞こえてきた。辺りを見回すが誰も居らず、薄明かりの中に佇む家々とただ平らなばかりの田畑があるだけだった。気のせいかと思い、再び歩き出したとき、またも笑い声が聞こえた。あまりに鮮明に聞こえたので、

僕は反射的にその場を飛び退いた。

——明日の夕刻、宵の口に私の屋敷跡においでなさってください。
弔いをしてくださいませんか？

あの娘の声だった。弔い？何の弔いをすると言うのだろうか？

道ばたで朝日が昇るのを見ながら、ぼんやりとしているうちに、
僕の意識は途切れた。

第四話：醜陽歌（前書き）

神無の娘の胸中（？）です

第四話：醜陽歌

私は失った。何もかも。

涙を流すことさえ忘れた。

ああ、あの朝日のなんとおぞましいことだろう。あの一見して美しい陽光は、私たちが生きた闇という名の牢獄を解き放ち、更なる悲劇の呼び水となるのだ。

終わりを告げよう。私たち一族のたどってきた運命に。

目を閉じよう。もう決して迷わぬように。

ああ、母さん。私は今、この現状に別れを告げようとしています。

私は決めました。

私は決めました。

この結末に、私の心は歓喜しています。

祖先よ、あなたたちは私の選んだ道にお怒りになるかもしれない。しかし私にはもう耐えられないのです。私にこの先もこうして霜の床で袖を濡らせなどとはゆめゆめ仰いますな。古に神の禁忌に触れたあなた方をお恨み申し上げます。

ああ、夜が明ける。夜が明ける。鳥たちよ、歓喜の歌声を聞かせてはくれないか。弔いの、しかし華々しい歓喜の歌を！

紅々とした村が見える。私の目に映るのは真実そのもの。虚実のいつさいも私の前では真実をさらけ出す。

さあ、今日は最後の宴。そうだ、あの方をお招きしましょう。私の宴をあの方にもご覧いただかなければ。

悲劇で幕引きされる物語ほど美しいものはない。悲壮感ほど人の哀愁を誘うものはない。この結末を、あの方はどう思うだろうか。

ああ、何故もつと早く決断してしまわなかったのかしら。苦しみからやっと解放される。悩んでいたのが馬鹿みたい。生きている限り、やはり何も感じないというのは不可能なのだ。太陽が昇った。

さあ、歌い、踊りましょう。

第五話：神楽の夜に

目を開けると、見慣れた光景がそこにはあった。木目が丁度人が断末魔の叫びを上げているように見える天井。僕の家だ。

身体を起こすと酷く頭痛がして、軽くこめかみを押さえる。熱は無いみたいだ。

頭がぼんやりして思考に霞がかかったようになってるのは、頭痛のせいだけではないだろう。昨夜の出来事が順を追って思い出せない。ただ鮮明に瞼の裏に焼き付いているもの、あの娘の才。

――弔い

耳の奥で、思い出したかのようにその言葉がジクジクと疼いた。子どもたちの遊ぶ無邪気な声が、冬のものにしては暖かすぎる陽光とともに、粗末な小窓からどっと溢れてきた。

「あの娘は…」

どうしているだろうか。帰る場所を失った少女は今、何を思っているだろうか。

――弔い

鈍く疼く言葉に、何か引っかかる。何だろう、この息苦しさは。ふと、懐かしく、けれど苦いような、そんな気持ちになった。けれどそれが自分の内側のどこから来るものなのかわからない。

「夕刻…」

行かなければいけない、そんな気がした。

少し日も傾き始めた頃、僕はまた村をぶらぶらと歩いていた。宵の口には、まだ時間がある。

しばらく歩いて、はたと足を止める。小さな古ぼけた神社。普段は人が滅多に來ないこの場所に、今日は珍しく人が溢れるほどに境

内に集っていた。不思議に思い、人混みへと足を向ける。人混みの中心に目を向けると、鬼とも子どもともつかぬ奇妙な面を着けた人間が神楽を舞っていた。

——鬼追い祭りか

鬼追い祭りとは、簡単に言えば夢鬼童を払うための祭りである。

毎年神社の境内の周りに夜通し篝火をともし夜の闇を追い払い、鬼の面を着けた者、巫女の面を着けた者の順で神楽を舞う。そうして夢鬼童からの災厄を払うのだ。

忘れていた。今日だったのか。

神楽を眺めていると、何故だかまたあの懐かしく、苦いような気持ちになった。

ふと、思考の片隅に引っかけかりを見つけ、そつとすくい上げると、懐かしい日、幼い頃、母親と鬼追い祭りに来たときの記憶だった。

人混みの中に、小さな女の子が見えた。その子の母親と僕の母親はとても親しげに話していたのを覚えている。だけど彼女たちの顔が思い出せない……ああ、彼女たちは頭から薄手の着物を笠の代わりのようにして被っていたのだ。だから顔がよく見えなかった。女の子の顔が一瞬見えた気がした。色白の肌、まっすぐすぎる強い瞳——

『楓は崖で足を滑らせたんじゃないか！お前らがっ……お前らがっ……！』

蘇る父親の声。灰がさらさらと舞う。鳴り響く笛の音、篝火に照らされた面の薄気味悪い形相、誰も居ない明け方の境内、繋いだ手

——我に返る。冬だというのに、額には玉のような汗が流れていた。

足は自然と神無の屋敷跡へと向かって走り出していた。

——弔いをしてくださらない？

全てを、思い出した

第六話…キオク

——もうすぐ、もうすぐ来る

私の胸は高鳴っていた。

「…思い出したのね」

自然に笑みが零れる。——来た

村を見下ろす高台の焼け跡、振り返ると、暗く沈む夕日に照らされた男が居た。

屋敷跡に着くと、毒々しいほどに真っ赤な夕日に照らされた娘が居た。焼け跡の黒の中に佇む真っ赤に染まった彼女は、妖しいほどに美しかった。

「ハルカ——」

彼女は楽しそうに頷いた。

「全て…」

僕が言いかけると、ハルカはわかっているというふうに頷いた。そして既に夕日の殆ど沈んでしまった村を指さした。意をはかりかねて目線で問うと、見よ、とだけ彼女は答えた。

村を見下ろすと、鬼追い祭りの篝火だけが妙に鮮やかに見えた。神社を囲むそれは、集う人々を狙う人魂のように思えて、少し薄気味悪かった。それでもそこから目が離せない。ただ篝火が燃えている、ただそれだけの光景に、不思議に見入ってしまう自分が居た。

日が、沈む、沈む。

村は神社以外完全に闇にとつぷりと浸かってしまった。篝火の朱が、いっそう華やぐ。

「何も…」

無いじゃないかと言おうと振り返ると、ハルカの無邪気な笑い声が

響いた。

「今日よ。覚えておいでかしら」
言葉に詰まる。

「あの日も、こんな風の強い夜だったわ」
言葉に反応するかのように辺りを風が駆ける。

「丁度あんな風に炎の朱が闇に鮮やかでねえ…」

返す言葉が見つからず呆然としていると、背後から鏡を引っ掻いたかのような鋭利な叫び声が上がった。見ると、大きな、勢いのある炎が神社を包んでいた。きやらきやらとハルカが笑う。

「ハルカ…！」

「火葬場の火とそっくりね。見たでしょう？あなたも。母さんが、あなたの母親の友人である神無楓が、殺されて、灰になるところを！」

ハルカから目をそらす。

「私の両親の死に異を唱えたあなたの御両親も、変死で亡くなったそうね。もっとも、あなたはその後私たちに関する記憶とをなくしてしまった…でも…」

ハルカの強く、まっすぐな視線が痛い。

「私は覚えていたわ」

背後からは逃げまどう人々の叫び声が絶え間なく響いている。

「…弔いとはこのことか」

「ええ、昨日の夜、この光景が“見えた”の。あまりに朱が美しかったから、墓前に供える花はこれが良いと思ったの」

ハルカは淡々と語る。

「“見えて”いたのに、助けようとは思わなかったのか」
ハルカは嘲笑するように薄く笑みを浮かべる。

「思わなかった、微塵もね。それどころか、全て無くなってしまえば良いと思ったわ」

相変わらずまっすぐに僕を見つめる瞳は悲痛の色を湛えていた。
今日は風が強い。炎は風に煽られて、背後で僕らの郷土を、着々

と焦土へ変えている。火の回りが速すぎて、既に人の手には負えない段階まで来ている。どうして良いかわからず、呆然としていると手に冷たいものが触れた。ハルカの手だった。

「いつだったかしらね、二人でどこかに行ってしまったおうなんて言ったのは。…こうして手を繋いで」

覚えている。たしか、ハルカの母親が亡くなって何日か後の夕暮れ時だったと思う。誰も居ない神社、幼いハルカの顔が蘇る。

「行きましょう。私たちが普通に暮らせる場所を求めて」

「ここに…ここに残る」

「残る？こんな焦土に？」

ハルカは嘲笑した。

「大丈夫、ここを出ても、上手くやっていけるから」

「…それは“見えた”のか？」

ハルカはどちらともとれない笑みを見せる。彼女はおもむろに片隅に咲いていた椿を一枝手折ると、それを下で炎上する村に投げ入れた。

僕は村を後にした。

彼らが去った後、村跡には誰が植えたでもないというのに、鮮やかすぎるほどの緋色の椿の花が咲き誇った。村を見渡せる高台の椿は特に見事で、季節になると近隣の村々から見物人が絶えなかった。その場所の片隅に誰が何のために建てたのかはわからないが、小さな祠がある。ただ、そこに一年に一度、椿の花を置いて帰って行く男の姿を見る者があるのだという。

第六話：キオク（後書き）

最初考えてた以上に黒いお話になってしまいました（汗）

エピローグ

ねえ、ハルカ。私はこの先居なくなるでしょう。でもね、強く生きなければ駄目よ。

あなたが生まれたとき、二つの未来が見えたの。私たちの郷土を助けられるのはあなたしか居ないの。

神無の始まりを知ってるかしら。元々神無の先祖は、村を災厄から守るために神に請うて禁忌の力を授かった。しかしそれは異端、未知のもの。集団社会はいつでも異物を排除するもの、でも私たちの先祖はそれをわかっている上で禁忌に手を出したのよ。

お願いハルカ。

私の可愛い子、先祖たちの意を受け継いで：ねえ、ハルカ。ねえ、ハルカ。どうかこの名と同じように、遙か遠くを見つめて生きて。村を見捨てないで。少しだけ、辛抱して。あなたは必ず幸せに暮らせるから。村を焦土にしないで：。お願い、村を助けて：私たちが暮らしたこの土地を：

ハルカ、ハルカ、私の可愛い子。今見えるあなたの未来が、あなたの手で変えられることを信じているわ。 ああ、夜が明けてしまふ。私にはあの陽光が恐ろしい。この子の未来を決定づけているかどうか、とても恐ろしいの。この陽光が、新たな悲劇を呼んでいるように：

ああ、ハルカ。お前を守ってやれない自分が情けない。見えた未来を変えることは出来ないと言うけれど、お前なら変えられる。遙か遠くの未来を明るいものに変えることが出来る。ハルカ、この名とともに、この村の全てをお前に託します。

ハルカ：

ねえ、ハルカ：

エピローグ（後書き）

終わりました…！（汗）最初計画していた以上の暗さ…もう少し明るい話になる予定だったのに！ハルカを暴走させすぎました（苦笑）ご愛読ありがとうございました！感想などいただけるとうれしいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0504e/>

夢幻想

2010年12月30日03時40分発行